

1 汚斑病【病原体：*Cladosporium*属菌（糸状菌）】

A 発生生態

- 1 葉のみに発生する。初めは淡黄色のしみ状の斑点を生じ、拡大して褐色・円形の病斑となる。病斑上にはすす状のカビを生じる。
- 2 8月～9月に降雨が多いと多発しやすい。生育中～後期に肥料切れを起こした場合に多発する傾向にある。
- 3 病原菌は、菌糸や胞子の形で被害植物について越冬し伝染源となる。

B 化学薬剤以外の防除方法

- 1 発病の多いところでは耐病性品種を用いる。
- 2 たい肥などの有機物を十分施用して地力を保つ。
- 3 基肥には緩効性肥料を活用するとともに追肥にも留意し、肥料切れにならないようにする。



農業使用時はラベルをよく読み、記載された登録内容に基づいて使用するとともに、農業の使用を指導する際は最新の登録情報入手してください。



熊本県の防除指針に採用されている農業の検索システムへのアクセスはこちら！

2 乾腐病【病原体：*Fusarium*属菌（糸状菌）】

A 発生生態

- 1 いもに発生する。軽症の場合はいもの断面に赤色の小斑点が見られ、重症になると断面が一面に赤褐色となりスポンジ状に腐敗・空洞化する。重症の場合は地上部にも葉脈間の萎れ等がみられる。
- 2 種いもとして親いもを用いると伝染の危険性が最も高く、次いで子いも、孫いも、ひ孫いもと低くなる。
- 3 土壌及び種いもにより伝染する。病原菌は、り病いもの残さとともに土中に残り、また土壌中における生存期間が長く、4～5年後に作付しても発病することがある。

B 化学薬剤以外の防除方法

- 1 健全いもを使用するが、できれば孫いもを用いる。
- 2 輪作は必ずしも有効ではないが、サトイモを休閑する期間はできるだけ長くする。
- 3 り病いもはできるだけ除去し、ほ場に残さない。



農業使用時はラベルをよく読み、記載された登録内容に基づいて使用するとともに、農業の使用を指導する際は最新の登録情報を入手してください。



熊本県の防除指針に採用されている農業の検索システムへのアクセスはこちら！

3 黒斑病【病原体：Ceratomyces属菌（糸状菌）】

A 発生生態

- 1 いもの表面に灰白色の菌叢が広がり、進行すると中央が黒色に腐敗してくぼんだ病斑を生じる。
- 2 収穫期の脱球傷や、収穫時の傷、線虫による傷が病原菌の主とした侵入経路である。最適発病条件は25～27℃、湿度100%であり、夏場の高温多湿時に収穫したものは発病しやすい。
- 3 主として種いもにより伝染する。また病原菌は、り病いもなどとともに土壌中に残り、土壌伝染する可能性もある。

B 化学薬剤以外の防除方法

- 1 発病は場からは種いもをとらない。
- 2 無病いもを選ぶ。
- 3 発病した催芽床の土は翌年使用しない。
- 4 掘り取り時及び選別時にいもを傷つけないようにする。



農薬使用時はラベルをよく読み、記載された登録内容に基づいて使用するとともに、農薬の使用を指導する際は最新の登録情報を入手してください。



熊本県の防除指針に採用されている農薬の検索システムへのアクセスはこちら！

4 疫病【病原体：Phytophthora 属菌（糸状菌）】

A 発生生態

- 1 病徴は葉や葉柄、いもに見られる。葉での症状は、はじめ円形～楕円形の黄褐色の斑点ができる。斑点が多くなると、褐色の同心輪紋のある大病斑となる。病斑は破れやすい。ひどくなると葉柄が褐色、黄変し、葉は枯死する。
- 2 春から秋に発生し、特に、比較的低温で多湿の時に発生しやすい。雨天が多いとまん延する。
- 3 被害植物の組織中の菌糸や卵胞子が、翌年の伝染源になる。

B 化学薬剤以外の防除方法

- 1 健全な種いもを用いるとともに、収穫後は被害残さの処分を行う。
- 2 排水対策やほ場の衛生管理を行う。

C 薬剤防除のポイント

多発後の防除は困難なので、薬剤防除は予防および発生初期に重点をおく。



農業使用時はラベルをよく読み、記載された登録内容に基づいて使用するとともに、農業の使用を指導する際は最新の登録情報を入手してください。



熊本県の防除指針に採用されている農業の検索システムへのアクセスはこちら！

5 軟腐病【病原体：*Pectobacterium*属細菌（細菌）】

A 発生生態

- 1 主に葉や葉柄に発生するが、いもにも発生することがある。葉は黄変して巻き上がり生育が劣る。葉柄は地際部が水浸状となり、次第に上方に広がって軟化腐敗し倒伏する。いもでは萌芽部付近から発病し、軟化腐敗する。
- 2 病原細菌は、アブラナ科植物の軟腐病と同一で土壌伝染が主であるが、種いもによっても伝染する。
- 3 土壌の過湿が本病発生の誘因となる。

B 化学薬剤以外の防除方法

- 1 過度のかん水を避ける。
- 2 多発地でのマルチ栽培は透明プラスチックマルチを避け、黒色プラスチックマルチを用いる。
- 3 窒素質肥料の多用を避ける。
- 4 被害残さの処理などほ場の衛生管理に努める。



農業使用時はラベルをよく読み、記載された登録内容に基づいて使用するとともに、農業の使用を指導する際は最新の登録情報を入手してください。



熊本県の防除指針に採用されている農業の検索システムへのアクセスはこちら！

6 ウイルス病【病原体：下記の通り（ウイルス）】

A 発生生態

モザイク病の病原ウイルスは、キュウリモザイクウイルス（CMV）及びサトイモモザイクウイルス（DsMV）が知られている。CMVはアブラムシにより伝搬され、種いもによる伝染の可能性は少ない。一方、DsMVはアブラムシによって伝搬されるほか、種いもによっても伝染する。

B 化学薬剤以外の防除方法

1 CMV

- 1) プラスチックシルバーフィルム等によるマルチ栽培を行う。
- 2) 多発地では石川早生など発病の少ない品種を栽培する。
- 3) ほ場周辺の雑草はアブラムシの発生源となるので、できる限り除草する。

2 DsMV

種いもの更新を行う。

C 薬剤防除のポイント

媒介虫の防除（虫害アブラムシの項を参照）



農業使用時はラベルをよく読み、記載された登録内容に基づいて使用するとともに、農業の使用を指導する際は最新の登録情報を入手してください。



熊本県の防除指針に採用されている農業の検索システムへのアクセスはこちら！

7 ハダニ類 (カンザワハダニ)

A 発生生態

- 1 主にカンザワハダニが発生する。
- 2 梅雨が明けてから急激に増加し、8月中、下旬にピークがみられ、9月下旬を過ぎると減少する。
- 3 増殖が著しく早く、夏季の高温時には、10日間ほどで卵から成虫になる。

B 化学薬剤以外の防除方法

ほ場周辺の雑草が発生源になるので、周辺雑草を除去する。

C 薬剤防除のポイント

葉にわずかでもカスリ状の退色部がみられたら防除する。



農業使用時はラベルをよく読み、記載された登録内容に基づいて使用するとともに、農業の使用を指導する際は最新の登録情報を入手してください。



熊本県の防除指針に採用されている農業の検索システムへのアクセスはこちら！

8 アブラムシ類 (ワタアブラムシ)

A 発生生態

- 1 主にワタアブラムシが発生し、CMV、DsMVを伝搬する。
- 2 生育中～後期の6～9月にかけて葉裏、新芽などに群生し加害する。

B 化学薬剤以外の防除方法

ほ場周辺の雑草が発生源になるので、周辺雑草を除去する。



農業使用時はラベルをよく読み、記載された登録内容に基づいて使用するとともに、農業の使用を指導する際は最新の登録情報を入手してください。



熊本県の防除指針に採用されている農業の検索システムへのアクセスはこちら！

9 ハスモンヨトウ

A 発生生態

- 1 夏季が高温乾燥に経過する年は早くから発生する。
- 2 老熟幼虫になると、日中は物かげにかくれて夜間に食害する。また、老熟幼虫に対しては薬剤の効果が効きにくくなる。

B 化学薬剤以外の防除方法

卵塊や分散前の若齢幼虫を除去する。

C 薬剤防除のポイント

老熟幼虫に対しては薬剤の効果が劣るため病虫害防除所のホームページ (<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/201915.html>) に掲載されるトラップデータ等の情報に留意して早期発見、適期防除に努める。

ハスモンヨトウの幼虫



ホームページを
チェックだモン!



©2010 熊本県くまモン



農業使用時はラベルをよく読み、記載された登録内容に基づいて使用するとともに、農業の使用を指導する際は最新の登録情報を入手してください。



熊本県の防除指針に採用されている農業の検索システムへのアクセスはこちら!